蝶人

神々のあらそい

彼は蝶だった。
彼は人だった。
俺はどうしようもなく、人間だった。

子供の頃から、蝶が好きだった。子供の頃に蝶や虫が好きだったという人は珍しく無いとは思う。だが俺は、ずっと好きでい続けていた。流石にもう虫を捕りに行ったりはしないが。社会人になった今でも時々、休みの日にこうして蝶の展示会に来たり。時折思い出したように綺麗な蝶を調べてみたり。格別熱心ではないが、全く知らないわけでもない、一般的な「好き」の感じで、蝶を好きでい続けている。

だから、「蝶と蛾の違いは？」と聞かれたときもすぐに答えられた。そんなことを突然聞かれるとは思ってもいなかったが。その男は、突然俺に話しかけてきた。

「蝶と蛾の違いを知っていますか？」

低く、澄んだ声が、俺に飛んできた。振り返ると、そこには細身のスーツに身を包んだ、背の高い男が存在していた。そう、存在していた。圧がある、ごつい体格をしているわけではない。目は細く、鼻筋が通っている。顔が整っていて美しいが、華があるというよりは儚げな印象だ。なのに、何故か存在感を感じた。

「まず触覚の形が違いますね。また活動時間も異なります。それから…」

気付くと俺は、男の質問に丁寧に答えていた。いきなり何ですか、とか、あなたは誰なんですか、とか言う前に。男の存在感に呑まれ、丁寧に話をしていた。

「なるほど。お詳しいんですね。答えてくださりありがとうございます。」

一通り語り終わったあと、男はそう言った。話し終わってふと周りの景色が目に入った。蝶の展示会場の一角に、俺と男は立っていた。幸いにも他の人は居なかった。この静かな空間で、急に語り出してしまったので、他の人がいたらさぞ迷惑だったことだろう。

「あ……　えーっと、あなたはどちら様で？」

「申し遅れました。私は蝶野と申します。蝶を収集していまして、近々展示会をしようと思っているので、今日はここに来ました。」

「あ、高木といいます。それで、どうしてあんな質問を？」

「はい。先ほどは突然すみません。私、展示会をしたいと思っているのですが、人手が足らず、詳しそうな方を探していました。どうですか高木さん、お手伝い、お願い出来ないでしょうか？」

「えーっと、日程は？　あと時間とか。都合が合えば、お手伝いできますが」

「ありがとうございます。ここでは何ですし、展示するものの紹介も兼ねて、一度うちへ来ていただけますか？」

「それは……良いんですか？」

「ええ。是非、お願いします。」

蝶の展示会に来ている人をスカウトしに来るなんて、なかなか行動力のある変な人だとは思ったが、展示会の主催側というのには興味があったし、良いかもしれないと思った。それに何より、自宅のコレクションを見せてくれるという。楽しみだ。色々と不安の残るところもあるが、蝶を見られるならついて行こうと思った。

「それでは……　よろしくお願いします」

「はい……！　ありがとうございます。距離があるので、タクシーで参りましょう。」

タクシーは古びた洋館の前で止まった。広そうだし、蝶を集めている人が住んでいそうな雰囲気があるなと思った。タクシーを降りて洋館の門をくぐる。蝶野さんに扉を開けてもらって、中へと入った。入ってすぐの玄関は薄暗く、埃っぽかった。こんなところに人が住めるのだろうか。

「本当に、ここに住んでるんですか？」

「はい。といっても、最近住み始めたのですが。高木さん、騙してしまいすみません。ここには蝶のコレクションはありませんし、展示会の手伝いをしてほしいというのも嘘です。」

どこか変な人だとは思っていたが、騙されていたとは。蝶見たさについてくるんじゃなかった。俺は扉の前に立っている彼の横をすり抜けて、外へ出ようとした。すんなりと扉に手が届く。驚いて振り返ると、彼は俺に背中を向けて立っていた。

彼の背中には蝶の羽が生えていた。

息を呑む美しい色。モルフォ蝶の、美しい青。綺麗な青い羽が、彼の背中についていた。

振り返って彼は言う。

「私は蝶であり、人間なのです。話を聞いて頂けないでしょうか。」

「是非」

美しさに魅入られて、俺は非日常へと足を踏み入れた。

彼は二日後に死ぬのだという。何故人の体を持っているのか、何故ここにいるのか、何故人間として振舞えるのか、何もわからないがこれだけは分かるという。気付けばこの姿で洋館にいて、自分の寿命が残り三日だと確信した。全てが不思議で受け入れ難いことであったが、不可解なことに頭を悩ますよりも残された時間を自由に生きたいと思い、協力者を探すことにした。そして何とか見つかったのが俺だったという訳だ。

「どこかに行きたいとか、何かをしたいだとか、そういうことはいいんです。ただ、私が生きていたということを、誰かに知ってほしくて」

「俺で良ければ、見届けさせてください」

「ありがとうございます。それではまた明日も、ここに来てください。」

「それだけでいいんですか？」

「ええ。お話を聞いて頂けて嬉しかったです。」

「でも、もう少し何か」

「色々ありすぎたのでしょうか、疲れと眠気が一気に押し寄せてきてしまい……。あと二日をしっかり生きるために休んでおきたいのです。申し訳ございません。」

「そういうことでしたら、分かりました……　また明日来ますので、待っていてくださいね。」

「はい。よろしくお願いします。」

こうして俺は洋館を後にした。未だに信じがたいし、理解できない事や不思議なこともたくさんある。でも目の前で彼は確かに生きていて、理解ができていなくても存在しているのだと思った。残り二日で彼は死んでしまう。難しく考える時間はそのあとにしよう。幸い明日も会社は休みだ。明後日はあるが、一日なら何とか休める。俺は明日が来るのを楽しみにして寝た。

次の日の朝は、早くに目が覚めた。朝から気分が良かった。彼にケーキを買っていこうと思った。食べられるかは分からないが、記念にはなるだろう。彼は、生きていたことを誰かに知ってほしかった、と言っていた。ケーキは誕生日や記念日を祝うものだから、きっと喜んでくれるだろう。

予定の時間より早く家を出た。ケーキ屋に寄ってから、またタクシーで彼のいる洋館へ向かった。彼は喜ぶだろうか。それにしても彼の羽は美しい。あの青色の透明度。艶。光の加減で変化する微妙な色彩。今日もまた見られる。楽しみだ。

洋館の前に着いた。門をくぐる。扉に手をかける。ふと、呼び鈴がないことに気づいた。このまま入ってしまって良いのだろうか。少し考えてから、ノックをした。返事はない。再び扉に手をかける。先ほど扉を開きかけた時に気づいたのだが、どうやら鍵はかかっていないようだった。扉をそっと開ける。

「おじゃましまーす……」

依然として応答はない。靴を脱がずにそのまま上がる。昨日彼と話した部屋へ向かうことにした。昨日は寝ると言っていたし、まだ寝ているのかもしれない。それにしても不思議な洋館だ。昨日彼といるときには気が付かなかったが、小さな部屋がいくつもあるし、廊下や部屋にものが散乱している。食器、家具、小物、他にも何か分からない道具がたくさん。その上に埃が積もっているからひどい有様だ。ある程度使えるのは昨日使った部屋くらいなのかもしれない。

昨日の部屋に着いた。やはりしんと静まり返っている。彼はソファーの上で横になって寝ていた。彼を起こそうと、肩に手をかけて揺らす。声をかけながらしばらく揺らすが、起きない。

布団を剥がしてみた。彼の胸にはナイフが刺さっていた。

彼の顔に触れる。冷たかった。彼は死んでいた。
悲しかった。背中が痛かった。足元に置いておいたケーキの上に、倒れてしまった。

ふと目覚める。彼はどうなったろう。俺はどうなったっけ。目の前に、彼がいた。美しい羽を広げて。俺に笑いかけている。
あぁ良かった。彼は無事だったんだ。良かったなぁ。
俺は喜びのあまり舞い上がって、彼のもとに飛んで行った。

彼は蝶だった。
彼は人だった。
俺は蝶の夢を見た。